

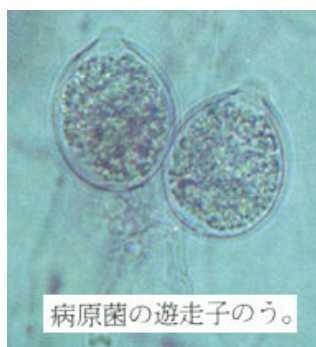
## <ウド疫病>



軟化茎は伸長せず、腐敗する。



軟化茎の褐変、腐敗。



病原菌の遊走子のう。

## <ウド疫病>

病原菌：Phytophthora cactorum (Lebert et Cohn) Schröter

### 1. 症 状

軟化栽培中の軟化茎に発生する。軟化茎の発芽直後、あるいは20～30cm伸長後に地際部から暗褐色～暗灰褐色、水浸状の病斑を生じ、腐敗拡大する。時に中間部から病斑が進展する。茎内部に軟腐が進むと罹病部で折れることがあり、また軟化茎全体の褐変腐敗もしばしば認められ、罹病株の根部も軟腐する。発病して日数を経た罹病茎は細菌に汚染されている場合が多いので、新鮮な罹病茎により診断する。

### 2. 生 態

抑制軟化栽培に激しい発生が認められるが、現在のところその他の軟化作型では発生は少なく、また根部養成の畑（露地）では発生を認めていない。本病菌はタラノキ立枯疫病やキク、シャクヤク、リンゴなどの疫病を起こす。ウドでの発生生態はよく分かっていないが、発病後の芽土を再使用すると病徴が再現することから、土中の残渣中に菌糸や卵胞子の形態で残存し、これが伝染源となると思われる。

### 3. 防 除

- 1) 健全な根株を伏込む。
- 2) 芽土を定期的に交換する。
- 3) 発病した芽土は使用しない。
- 4) 未登録だが、リドミルMZ水和剤、ダイセンステンレスによる根株消毒が有効である。

### 4. 記 事

本症状は、1983年（昭和58年）頃から、北多摩地区で、抑制軟化栽培中に多発していたが、1988年に本病によることが明らかとなった。